

眞実一路

山本有三著

眞実一路

山本有三著

路 一 実 眞

昭和二十七年五月十六日 發行
昭和二十九年三月二十日 十七版

定價 貳百貳拾圓

地方
賣價 貳百參拾圓

著 者 山 本 有 三

發行者 佐藤義夫
東京都新宿區矢來町七一

印刷者 曾根盛事
東京都品川區大井寺下町二四

發行所 株式會社 新潮社
東京都新宿區矢來町七一

電話九段(33)一一一五番
振替東京八〇八番

(亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。)

印刷・扶桑印刷株式會社 製本・京橋加藤製本所
Printed in Japan

眞
実
一
路

眞実一路の旅なれど
眞実、鈴ふり、思い出す。

白秋「巡礼」

寄 附 金

一

義夫は朝はんの時間が一番苦痛だった。おとうさんと向きあつて食事をしなければならなかったから、晝は学校だし、夕はんの時はいっしょでないこともおり／＼あるが、朝はんは、どんな場あいでも必ずいっしょだった。

しかし義夫は、決しておとうさんがきらいなわけではなかった。おとうさんは、自分をかわいがってくれるし、自分もまた、おとうさんを尊敬していた。おとうさんは曲がったことはきらいなたちで、じつにきちんとした人だった。それだから会計課長になれたのだと、いつかねえさんが話してくれたことがある。会社のかえりに、おもちゃなんが買つてきてくれた事は、めつたにないが、買つてくれるような時には、きつと、もののいゝのを買ってくれるので、彼はおとうさんが好きだった。しかし、少しでもまちがったことをしたり、まちがったことを言つたりすると、いつも、じいっと、にらみつけるのが癖だった。こゝとはそん

なにがみ／＼言わなかった。口で言うよりも、目でしかるほうが多かった。義夫にはそれがかえつて、こわかった。だから、おとうさんの前に出ると、なんとなく窮屈で、するにもひざがくずせないし、——実際には、くずしたつてかまわないのだけれど、自然、こちらの氣もちが、くずせないような、堅い構えになつてしまふのである。

「義ちゃん、ごはんですよ。」

姉のしず子が茶のまで呼んでいた。

「あ、いま行く。」

義夫は机に向かつて朝の予習をやっていたが、そうすぐにも立ちあがらなかつた。やがて読本を閉じて、茶のまにはいつて行くと、おとうさんは、もう食卓の前にすわっていた。あい変わらず銅像のようにきちんとしていた。

「お早うございます。」

ということばが、どうしたのか、このごろ妙に氣はずかしくつて——なんだか、そら／＼しいような氣がして、義夫には言えなくなつていた。彼はすると、黙つて、あたまをさげた。そうしたら、父も黙つて少し首をさげた。

おとうさんとねえさんと義夫と、食卓をかこんで、食事がはじまつた。ねえさんがおハチのふたを取つて、ごはん



をつけていると、白い湯けがもち、がるように、もく／＼と立ちあがって、狭い四疊半の茶のまに、あったかい、なごやかなものが、ばあっとみなぎった。実際、ごはんの湯けだとか、のっぺのしるのにおいぐらい、いゝものはない。あれをかぐと、ひとりでにからだがあったまって、なんともいえない、なごやかな気分になってくる。が、そのあったかい、なごやかなもののなかに、義夫はともすると、えたいの知れない透きまを感じた。ひょいと、絵のない、なまフィルムのようなものが、ちらと、まぎれこんでくるのである。どうして、そんなひやつとするものが、あったかもののあいだにはいつてくるのか、彼にはよくわからなかった。けれども、彼がもの心づいてからというもの、彼のうちの食卓はいつもそうなんだから、近ごろでは、それが当たりまえのことのようにも思われるのだった。

「ねえさん、きょう、おみおつけ、なに。」

「おネギです。」

義夫は、なまネギをかんだ時のような、にがい顔をした。

「でも、ぞう義ちゃんのすきなものばかりもできないのよ。あしたは千六本にしてあげますわ。」

ごはんをよそうと、しず子は父のおワソにおみおつけをつけ、それから弟のワソを取りあげた。

「ぼく、いらないや。」

「おみおつけ、あがらないの。あがらなくっちゃいけませんよ、義ちゃんはいちところがきらいなんでしょう。だから、青いのだけ入れてあげますから、少しおあがんさない。」

義夫は父の顔を盗み見ながら、そっと、かぶりを振った。「だって、朝、おみおつけをあがらなくっちゃ……」

しず子のことばが終わらないうちに、「義夫。」と父のきりつとした声が、まっ正面から飛んできた。

「なぜ、そんなえり好みをいうんです。なんだってたべなさい。」

「……………」

「おまえはわがま、でいかん。東北地方の人をござらん。ごはんだって、ろく／＼たべられないんじゃないか。ネギはいやだの、何はいやだの、そんなぜいたくな事をいうと、ばちがあたるぞ。」

父はハシをやすめて、義夫のほうをじいっと見つめていた。

「ね、少しおあがんない。白いところは入れないようにしてあげますから。」

姉はそういつて、おみおつけを少しつけてくれた。ねえさんだけなら、ネギなんか、たべやしないけれども、おとうさんににらまれていては、どうすることもできなかった。義夫は薬でも飲む時のように、目をつぶって、おソンのふちに、いや／＼くちびるを持って行った。ネギのにおいが鼻を突いた瞬間に、なまフィルムがちらと通り過ぎた。彼はあわてて目を開いた。

「あ、そう／＼。東北地方で思いましたけれども、義ちゃん、きょう、お金もって行くんじゃない。」

「うん。」

「なんだい。学校でも寄附をするのかい。」

義夫の父はごはんをかみながら「また寄附か。」というような顔をした。彼は会社でもだしているのに、また取らるゝのは、少しおもしろくなかった。

農林省や内務省の役人たちが給料の一部をさいて、月々、凶作地に送るといふ記事が新聞に出て以来、三井やそのほかの会社でも、社員の月給の幾ぶんを（月々でないまでも）寄附する企てが起こった。それに引きずられて、彼の出て

いる会社でも、同じような方法で、寄附金を凶作地に送った。國民の一部に飢餓に悩んでいる人がある以上、同胞のひとりとして、これくらいのことには当然の義務である。これに対して、彼は少しも異議はなかったけれども、しかし、関西に風水害があった、東北にき／＼んがあったというたびに、小学生が寄附することには、彼はあまり好感を持っていなかった。一家をなしておる者は、これはお互のことだから、それ／＼、ぶんに應じて寄附すべきものと思うが、まだなんの働きもできないものに、寄附を求めることは問題である。き／＼んなぞという大きな事件に対しては、当然、國家が緊急の処置を取るべきものであって、小学生などにはおのずから小学生の道がある。こんなところにまで小学生が出しゃばる必要があるものかと、彼は心のなかで、そう思った。しかし、どういうものか、この風習はどここの小学校でもおこなわれているのだから、義夫の行つてる学校にだけ文句をいうわけにもいかなかった。

「それで、いくらぐらいするのだい。」

「二十銭以内と書いてあったようでした。」

「二十銭以内か。——それじゃ義夫、今度は、おまえがお

だし。」

「いやだあ。——」

「そんなこというが、これはおとうさんがだすものじゃない。おまえの寄附なのだから、おまえがだすのだ。おとうさんはもう会社のほうでだしている。——おまえ、小づかいをもらっているんじゃないか。そのほうからだしなさい。」
「でも、あれで科学グラフ買うんだもの、そんなことすりゃ、買えなくなっちゃあ。」

「だから、そこを儉約してだすのが……」

「だって、おとうさん。どこのうちだって、寄附はみんな、おとうさんがだしてくるんだぜ。」

そういわれてしまうと、もうおしまいだった。父は苦笑しながら、小学生の寄附なんて意味がないと、彼は一層自説を肯定しないわけにはいかなかった。だが、自分なら、十銭や二十銭、なんでもないけれども、なかには、その十銭、二十銭に、相当苦労する親たちもあるのじゃないかと思うと、彼はなおいやな氣もちがした。

「あの、いくら入れてやりましょう。」

食事が終わったあとで、しず子が寝た。

「そうだなあ。小学生なんだから、たゞ志しだけにすりゃ

いいんだろう。最高が二十銭なら、十銭も入れてやるさ。」
自分は今も会社からだしているんだから、それくらいでいいだろうと、彼は思った。

そこで、しず子は封筒に十銭白銅を入れ、おもてに金拾銭、守川義夫と書いて、それを義夫に渡した。

「なくすんじゃないやしませんよ。」

「うん。」

義夫は封筒をランドセルの隠しにしまった。それから黒いおび革に腕を通して、そいつを器用に背なかに押しあげると、彼は学校へ出かけて行った。

二

義夫は道はたに立って、ぽかんと落ち葉をながめていた。あお空に突きだしたスワ神社の大きなケヤキが、風を受けるたびに、ばあっとトビ色の葉を散らすありさまは、まるであの太木のかげに数千の小とりが隠れていて、風といっしょに飛びだすようだった。ざわ、ざわ、ざわ、といったと思うと、ぽら、ぽら、ぽら、と舞い落ちるぐあい、なんともいえずおもしろかった。

彼は風がとだえると、寂しかった。早く吹け、もっと吹け、と思った。このあいだの関西のおゝ風って、どのくらい吹いたんだろうな。あんなのが吹いてくると、おもしろいんだがなあ。

「何してるんだい。」

ひょいと背なかをたゝかれた。呉服屋の幸ちゃんだった。

「うん。」

義夫は、なま返事をしたが、少しきまりが悪かった。ふたりはいっしょに出かけた。

少し行くと、さかな屋の達ちゃんが店の前で小イヌと遊んでいた。そこへ松田病院の篤(アツシ)君もきた。みんなつれだって歩いて行った。

「君、寄附金もってきた。」

と、達ちゃんがいった。

「うん。」

と、篤君が答えた。

「君。いくら。」

「ぼく、二十銭。」

「そうか。ぼくも二十銭だ。」

と、達ちゃんがいった。

「ふふん。みんな二十銭なんだね。ぼくもそうだよ。」

と、幸ちゃんが横から口をはさんだ。

「義ちゃん、君もそうかい。」

達ちゃんがそばへ寄ってきた。

義夫はこういう形勢になっては、「うゝん、ぼくは十銭だ。」とはいえなかった。さかな屋の達ちゃんでさえ——義夫は平生、達ちゃんをばかにしていた。——達ちゃんですえ二十銭なのに、自分ひとり十銭とは、どうしてもいえなかった。

「うん、ぼくもみんなと同じだ。」

と、つい、いつてしまった。いつてしまってから、これはとんだ事をしたと思った。しかし、もうあとから、言い直すわけにはいかなかった。

義夫は急いでうちへ帰って、ねえさんに話して、あと十銭いれてもらおうかと思った。が、そんなことしていると、学校がおくれてしまふ。それじゃ、あすにしようか。お金をだすのは、あすだってかまわないだろう。けれども、ほかのものがきょうだすのに自分だけださないのはおかしい。

「ほくも二十銭だ。」なんていっておきながら……。

義夫はすっかり困ってしまった。達ちゃんのうちだつて二十銭だすんなら、うちだつて二十銭だしてくれゝばいいのに、と彼は道々なんでもそう思った。背なかのランドセルが、きょうは妙に氣になつて、義夫は胸の黒いおび革に無意味に手をかけては、やたらに引っぱつた。

「なあに、いゝや。——」

義夫は学校の門をくぐつた時、ふと、ある考えが浮かんた。「そうだ。そうすればいゝや。」と思つた。彼は右の手でズボンのポケットの上を軽くこすつた。ちいさくふくらんだものが、ポケットのなかから「大丈夫。」と力づよく答えた。

授業のはじまる前、クラスのものいいないところで、義夫は寄附金のはいつてゐる封筒をそつと開き、そのなかに十銭白銅をもう一つ入れた。そして封筒の上にねえさんが書いてくれた金拾銭という、拾の字の横に二の字を書きこんで、金二拾銭と訂正した。

始業のベルが鳴つた。

そとで遊んでいた生徒たちは、どや／＼教室にはいつて行つた。まもなく受け持ちの矢津（ヤズ）先生が見えた。

礼がすむと、

「先生、お金もつてきたんですが、いつだすんです。」

と、達ちゃんが立ちあがつて尋ねた。

「そこに持っているのかね。」

「えゝ、持っています。」

「持つてきてます。」

あちらにも、こちらにも、たくさん手があがつた。

「それじゃ、なくなすといけないから、授業の前にこちらに預かることにしよう。順番にこゝへ持つてきたまえ。」

寄附金を持つてきた生徒は、われ勝ちに教壇へ走つて行つた。先生はたちまち、それらの子どもによつて、取りまかれてしまつた。

「そんなに押しちゃいかん。順々に。順々に。」

と、矢津先生はやさしくいつた。そして持つてきたものを、いち／＼丁寧に調べて、金額と名まえを手ちょうにつけていた。

「先生、福見（フクミ）君が泣いています。」

達ちゃんがまた、もの知り顔に報告した。

「朝っぱらから泣いたりするんじゃない、四年にもなつて。」

矢津先生は生徒のほろを見ないで、せわしそりに袋の封を切りながらいった。それからなかをあらためては、しきりに書きこんでいたが、ふと、ある事に気がついたので、万年筆を動かしながら、

「みなさん、お金はきょうでなくともいゝんですよ。あしたでも、あさってでも、いゝんです。——それから、是非ださなくっちゃいけないっていうんじゃないんだから、ださない人は、ださなくともいゝんですよ。」

ことよったら寄附金を持ってこれないで、泣いているのじゃないかしらと思った先生は、遠まわしにそういった。先生は福見の家庭をよく知っていた。知りすぎるくらい知っていた。

ところが、そのことばをまるで聞いていないかのようには、「先生。」と、突然、達ちゃんがとんきょうな声をあげた。

「先生、お金がなくなっちゃったんですって、福見君のお金が。」

「なに？」

矢津先生は急に筆をおいて、教室を見まわした。福見は自分の机に突っ伏して、しく／＼泣いていた。

「どうしたんだ、福見。」

先生は改めて聞きたどした。

「なくなっちゃったんです。お金を持ってきたのに、なくなっちゃったんです。」

福見清作は泣きじゅくりながら、やっとそれだけ答えた。

「なくなっちゃまったって、たどなくなるわけではないじゃなか。どこかへ落としたんじゃないのかい。」

清作は首を振って、そうではないと、しきりに弁解した。

「それじゃ待っていなさい。あとで調べてあげるから。」

矢津先生は寄附金のほろをひと始末つけると、急いで授業をはじめた。そして授業が終わったところで、清作を教員室に呼び、こまかに事情を聞き取った。

清作の話すところによると、うちは今くるしいけれど、

こういうお金はださなくってはいけないといつて、おかあさんがはな紙に十銭白銅をおひねりのようにくるんで、けさ出がけに、渡してくれたのだそうだ。清作はそれを教科書のあいだに入れて持ってきた。授業の前に教室であけて見た時にも、それはちゃんとあったのだから、途中で落と

したはずはない。現にその時には、そばに義夫たちもいて知っているといるのである。ところが、先生から寄附金をだすようにといわれて、教科書の包みをあけて見たら、おひねりの紙だけあって、なか身がなくなっていたのだという。そのあいだ、ちょっと便所へ立ったことはあるけれども、あとはずっと教室にいたのだから、便所へ行ったひまに、取られたのではないかというのである。

清作は学課がよくできる生徒だった。彼のこの話に、いつわりがあらうとは思われなかった。

清作には、おとうさんがなかった。おかあさんだけだった。おかあさんは病院の雑役婦だった。そのおかあさんが、なけなしの金をだしてくれたのに、それがなくなってしまうては、せつかくのおかあさんの志しが無になってしまふ。先生はたいへん氣の毒に思つて、よく調べてあげるからと、清作をかえした。

それから受け持ちの教師は校長に相談した。校長も困つた。金額はちいさいけれども、これは決してちいさい問題ではなかった。しかし事をあらだてると、純な童心を傷つけることになるから学校としては、できるだけ目だたないように調査をすゝめることにした。

「どうした。まだわかんない。」「だれが取ったんだろかね。」なぞと、例のおせっかいの達ちゃんをはじめとして、級中のものは金十銭の紛失事件に対して、いずれも大きな興味を持っていた。しかし、その日はとう／＼、なんにもわからないでしまった。

放課後、義夫は校庭でキャッチボールをやっていた。そのとき矢津先生がきて、これをおとう様に渡すようにといつて、彼に一通の封書を渡した。

義夫はそれをポケットに入れたまゝ、なおキャッチボールをつづけた。それからランドセルをせおつて帰りかけた。と、うら門の横の掲示板のうしろに、清作がしょんぼり立っていた。

「清ちゃん、いっしょに帰ろう。」

義夫が声をかけた。清作は返事をしなかった。

「まだ帰んないの。」

「……………」

「遅くなるじゃないか。」

「ぼく、帰れないんだ。」

「どうして……」

「帰ると、しかられるもの。」

あゝ、あれでか、と義夫は思った。清作の顔を見ると、彼は子ども心にもいたわしく感じた。

「でも、君が悪いんじゃないから、しかたがないじゃないか。」

「だって……」

清作は多くをいわなかった。そしてまた、しく／＼泣きだした。

義夫はいよ／＼いたわしく思つて、

「ぼく、いっしょに行つてやろうか。——」

そういつたけれども、清作は答えなかった。義夫はふと考えた。いっしょに行つてやつたつて、なんにもなりやしない。そうだ。それよりは……と思つた。

彼は右のズボンのポケットに手を入れた。そして、ガマ口を隠しのなかでそつと明けて、指さきで穴のある白銅をさぐつた。彼はその一つを取りだすと、黙つて清作の手につかませた。

清作はけげんな目をして義夫を見た。

「いゝんだよ。いゝんだよ。」

義夫はそう言ひながら、無理に白銅をつかませようとした。しかし、清作はつかもうとしないで、手を明けてしま

つたものだから、銀いろのちいさい、平べったいものは、むなしく、ふたりのあいだにすべり落ちた。そして、ごこのように二、三べん地上を跳ねた。

ふたりの少年の目は、言ひ合わせたように、そのちいさい光るものの上にあつた。ふたりの口もとが自然にゆるんだ。

やがて義夫はこゝんでそれを拾つた。どろを拂うと、彼は黙つて清作の洋服のポケットに押しこんだ。

清作はそれを拂いのけようとした。しかし、義夫は右の手をあい手のポケットに差しこんだまゝいつた。

「いゝんだよ、君。いゝんだから取つておいて……」

今度は清作もそんなに争わなかった。ほおのあたりに明かるいものがぼろと浮いた。

義夫はそれを見ると、急いで驅けだした。まるで自分が悪いことでもして、逃げだしたようなかつこうだった。そのくせ、彼は、なんだか非常にいゝ氣もちでたまらなかつた。

彼はいっさんに驅けた。学校の門を出て、おゝ通りを左に曲がるまで、わき目もふらず驅けた。十一月だというのに、帽子の下に汗がいっぱい、にじみだした。彼は横丁に

曲がると、ほっと息をついて、ひたいの汗をふいた。

「あゝ、きょうはよかった。」

と義夫は思った。いつもなら学校にガマ口なんか持って行かないんだが、きょうは、かえりに科学グラフを買おうと思って持って行ったら、それがうまく役をたした。おかげで、達ちゃんや幸ちゃんなんかに負けないように、寄附金は二十銭にしたし、——このぶんはあとでねえさんに言ってもらってやら。——それから清ちゃんにもやれたし、……そのかわり、今月の科学グラフは買えなくなってしまったけれど、おとうさんがいったように、それが寄附ってんだから、しかたがないや。——

だが、おかしなもんだなあ、おとうさんに、寄附金はおまえがおだしっていわれた時には、ちっともだす氣がしなかったのに、自分だけだと、だれにも、なんともいわれないのに、清ちゃんにまでだしてしまうんだから……。

三

「たゞ今。」

義夫は、いつになく元氣でうちへ帰って行った。

珍しく、姉の姿が見えなかった。

「ねえさんは……」

と、女中に尋ねると、

「お出かけでございます。」

と、いった。

「どこへ行ったの。」

「さあ、どちらでございますか……」

と、笑いながら女中は答えた。そして、

「今夜はおかえりが遅いそりでございますから、おぼっちゃまは、おさきへおやすみなさいまして……」

「おとうさんは……」

「多分、ごいっしょなんでしょう。」

「ふふ、どこへ行っただろうな。」

自分もいっしょにつれてってもらえない事が、義夫には少し不平だった。

「ほんとうに、どちらでございましょうね。でも、きょうは、お嬢さまのご用らしゅうございますよ。だからおぼっちゃまは、今夜はおるす番……」

このごろ、人の出いりの多いことは、義夫もいくらか氣がついていた。それがなんの用事か、彼にはよくわからな

かったが、何かあるんだとは思っていた。

「おぼっちゃま、見あいつて知ってますか。」

やぶから棒に、女中がそんなことをいった。にた／＼笑っている顔が、へんにゆがんでいて不愉快だった。

「そんなもの知らないや。」

義夫ははねつけるように言った。はねつけながらも「それじゃ、ねえさんはその見あいつてのに行ってるんだな。」とすぐ勘づいた。彼は見あいつてどんなものか知らなかった。しかし、こんなものじゃないかしらという、自分だけの想像はつけられないこともなかった。彼は童話のなかの王子と王女を思いだした。心がなんとなくときめいた。

彼は、かえったらすぐに、ねえさんに話して、十銭だしてもらおうと思っていたのに、おとうさんも、ねえさんも、帰りが遅いと聞いて、かなり失望した。おとうさんも、ねえさんも、いないうちというものは——義夫は、おかあさんのいないうち、とは考えなかった。おかあさんははじめからいないのだから、それは考えのなかにはいつてこなかった。それに、このうちでは、「おかあさん」ということが日常ほとんど全く使われたことがない。——たとえようもなく寂しかった。女中はいるけれども、女中に

た／＼笑ったりすると、「ヘンゼルとグレーテル」のなかに出てくる魔女のような気がして、かえって氣味が悪いくらいだった。夕はんがすんだら、今夜は早く寝るように、とねえさんは言って行ったそうだが、義夫は自分ひとりだけさきへ寝ることは、なんだかこわかった。寝たあとで女中のどを締められやしないか、かまどのなかに入れられて、焼かれてしまやあしないか……「ヘンゼルとグレーテル」の話など思いだすと、夕ごはんがすんでも、とても寝どこへはいれなかった。

義夫は我慢をして起きていた。しかし九時が過ぎても、十時が過ぎても、おとうさんやねえさんは帰ってこなかった。そのうち、いつのまにか、彼は洋服を着たまんま寝いてしまった。

よく朝は、ゆうべが遅かったので、すっかりあさ寝をしてしまった。義夫はお急ぎで朝はんをたべると、飛ぶように学校へ駆けて行った。やっと時間にまに合った。

一時間めは修身だった。拾ったものは正直にださなくってはいけない。知らんふりをしてごまかすのは、悪い人間である、というお話だった。あんまりわかりきった話なのでつまらなかった。ゆうべの寝ぶそくも手つだって、義夫

はちいさいあくびをした。そうしたら、たちまち見つかってしまった。

「修身の時間に、あくびをするものがあるか。」

と、たいへん先生にしかられた。義夫は修身の時間が一層つまらなくなってしまった。

やっと授業が終わるベルが鳴った。義夫は解放されたような氣もちがした。彼はみんなといっしょに、そとに遊びに出ようとすると、「守川（モリカワ）」と矢津先生に呼ばれた。そして階段の下の小かげのところで、

「きのうの手がみ、おとうさんに渡したろかね。」と、いわれた。

義夫は「あつ。」と思った。彼の手は反射的にポケットに行った。

「どうしたんだ。渡さなかったのかい。」

きのうはおとうさんも、ねえさんもいなかったものだから、手がみをポケットに入れたまゝ、すっかり忘れてしまった。彼はその事を先生に話した。

「君はその手がみを、おとうさんに見せたくないんじゃないかい。」

先生は、にらむように義夫を見おろした。

「そんなことはありません。ほうとうに忘れちゃったんです。」

「よろしい。ちょっと教員室までおいで。」

義夫は教員室につれて行かれた。

「君は今度の寄附金、いくらだしたい。」

矢津先生はやゝ改まった調子でいった。

「二十銭です。」

「その通りうちからもらってきたのかね。」

こう聞かれては、義夫はちょっと返事がしにくかった。事がらが少しこみ入ってるから、子どもには簡単に説明ができなかった。それで、しばらくもじ／＼していると、先生は追いかけるようにまた別の問いをだした。

「君は福見にお金を十銭やったそうだね。ほんとうかい。」

「えゝ。」

「なんでやったのだい。」

「福見君が、うら門のところで泣いていましたから……」

「ふふ。だが、泣いていたからって、君は福見にお金をやることはないだろう。」

矢津先生の目がぎょろつと光った。